

は保食神乃廻首嚮國、則自口出飯、又嚮海、則鱧廣鱧狹亦自口出、又嚮山、則毛龜毛柔亦自口出とありて、鼻尻より出ことは見えず、

〔日本書紀欽十九〕二十三年七月、是月略、同時所虜調吉士伊企儼、爲人勇烈、終不降服、新羅鬪將拔刀欲斬、逼而脫、禪追令以尻シラタラ醫向日本、大號叫叫、曰日本將齧我臆シ、臆臆即號叫曰、新羅王啗我臆、雖被苦逼、尙如前叫、由是見殺、其子舅子亦抱其父而死、伊企儼辭旨難奪、皆如此、

〔陰德太平記三十八〕富田城下三箇所合戰之事

只今爰へ來リ候へ、手并ノ程ヲ見スベキゾト匂リケレ共敵耳ニモ不聞入、散々ニ射ル、其時木原生膚ニテ居ケルガ尻ヲ高ク擡ゲ、尼子ノ臆病者共、是ヲ喰ヘヤトテ、二ツ三ツ扣キテ見セケレバ、敵是ヲ見テ、憎キ族原ガ振舞哉、アレ射殺セトテ、鳥銃一度ニ雨落ト放チ係ケレ共、曾テ一モ不中ケリ、木原汝等ガ鐵炮ハ尻ニサヘ不中ト荒言吐テ、此ヲシホニシテ牽引ントテゾ、打連テ退ケル、〔貞丈雜記人物〕一古の中間小者は、きやはんをばき四幅袴を著し、十徳又はすあふひた、れなど、時によりて著しける也、今時の中間小者は、主の供するに、衣服のすそを高く引き上げ、腰にはさみて尻を出し、赤すねなどあらはしきたなげなり、

〔塵塚談下〕養生所へ甲戌○文化十一年十一月十日來病人之事

本郷春木町三丁目嘉右衛門店

安五郎  
戊四十一歳

右之者戊七月便毒を煩ひ、平愈の後に陰毛中へ大豆程なる腫物出來、膏藥にて早速に愈たり、其後骨痛を發し、養生所へ願出、逗留罷在の所、十一月十五日、湯風呂屋の縁側にて、尻餅をつよくつきけるが、いさ、かのさ、はりもなく入湯いたし、部屋へ歸りふせりけり、其夜小便に起立しに、頭骨がたたくからくみしくと、つよき音いたし、痛強く眩暈し、それより起臥出來かね、おき